

# 地形だけでなく 支城や防御施設で 守られていた一乗谷

いちじょうだに

**朝** 倉氏が本拠とした一乗谷。ここに城下町を築いた理由は、天然の要塞である山地によって四方が守られていたからです。しかし、朝倉氏は単純に天然の要塞という地形にのみ頼って、諸勢力から城下町を守ろうとしていたのでしょうか。

朝倉氏は、谷が狭くなる地点2か所に城戸（土塁）を築き、一乗谷を南北に閉塞する防御施設として機能させました。南側の城戸を上城戸、北側の城戸を下城戸といいます。また、朝倉館の背後に位置する一



一乗谷城跡模式図

(画像提供：福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館)

乗城山（標高475メートル）に一乗谷城を築きました。山頂には、千畳敷や一の丸など多くの平坦地のほか、等高線に対して直角方向に斜面を掘って造る畝状豎堀が山城全体で約140条も設けてあり、大変強固な防御施設であったことがうかがえます。

一乗谷城は標高が約470メートルであり、その向かいにある標高約250メートルの御茸山と高低差が大きく、一乗谷城の中の見張り場である「宿直跡」からは遠く福井平野や三国湊を眺めることができ、眺望という点においても、朝倉氏が一乗城山に城を築いた意図を読み取ることができます。

「〔朝倉〕家景、一乗城に居す」（『朝倉家伝記』）とあるように、早くから一乗谷、もしくは山上の一乗谷城が「本城」としての本格的な防御機能を有していたと考えられます。

そして、一乗谷城の周辺を見渡すと、朝倉一族やその家臣が築いたといわれる「支城」が多く点在しています。この支城が、本城と密接に関連し、敵を迎撃する際や防御する際に補助的な役割を果たしていたのです。支城は、一乗谷の東方、三万谷を越えた旧美山町には小宇坂城、西方に横山城や東大味城、北方には成

願寺城、南方に三峰城があり、三峰城のさらに西方の尾根上には丹波岳城や文殊山城が築かれ、福井平野や鯖江を眼下におさめていました。横山城と東大味城の間の尾根上には、いくつかの地点で尾根が堀で断ち切られている場所があります。これらの城は「点」ではなく「防御線」として連結して機能していたと考えられています。このように、一乗谷の周辺は城や防御施設によって、何重にも防御線が張り巡らされていたのです。

## 関連史料・ゆかりの地

### 宿直跡

### （一乗谷城跡）



山城見学会の様子

(画像提供：福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館)



宿直跡からの眺め

宿直跡からは一乗谷の城下町、足羽川や福井平野を眼下に見下ろし、さらにその奥には日本海までを臨むことができます。三国湊まで眺望がきくことから、朝倉氏の時代には見張りが待機していたのかもしれない。

【住所】福井市城戸ノ内町（下城戸跡の北に位置する安波賀という地区から山の尾根筋を登り約1時間30分）

参考資料等

松本泰典「コラム 一乗谷と周辺の城」、福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館編『国指定特別史跡 指定45年記念特別展 一乗谷～戦国城下町の栄華～』

執筆・協力

福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館 学芸員 石川 美咲